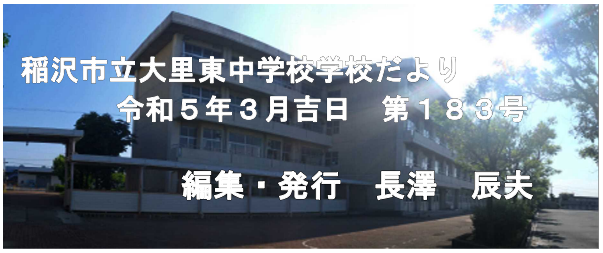
やまもも



紫の袖をつらねてきたるかな春立つことはこれぞうれしき
赤染衛門（後拾遺和歌集より）

本年度、最後の「やまもも」に稲沢市にゆかりのある赤染衛門の春を詠んだ歌を載せてみました。歌の意味は、「公卿の皆さんが紫の袖を列ねてやって来ましたねえ。春になることはこれだから嬉しいのです。」となります。高貴な色である紫の衣装で着飾った高官の行列を見て春の訪れを感じ取り、うきうきしている作者の姿が浮かんできます。赤染衛門は平安時代を代表する女流歌人の一人で、学者・文人である大江匡衡（おおえのまさひら）の妻となりました。赤染衛門は本名ではなく、養父の姓と官職からそう呼ばれたそうです。赤染衛門は、夫が尾張守（尾張の国の国司）に任じられ、いっしょに赴任してこの稲沢市に住んだといわれています。現在、赤染衛門が松の枝に衣をかけたといわれる松下１丁目には「赤染衛門歌碑公園」があります。

立派に巣立っていきました！

３月７日（火）、コロナによる規制を緩和し、教職員・生徒は原則マスク無しで卒業式を行うことができました。満面の笑顔で証書を受け取る子、全身全霊をかけて返事をしようとする子、そんな卒業生を目の前にして、胸が熱くなりました。式辞では、元プロ野球選手の野村さんの名言「人生、壁にぶつかるのは第一段階そこからが本当の勝負」を引用し、人生、壁にぶつかり、挫けそうになったときこそ、自分を成長させるチャンスであるといったことを話しました。

1･2年生 がんばってます！

卒業式の翌日の朝の光景です。稲沢市福祉協議会からいただいた幟のもと､現生徒会役員が中心になって、３月１６日（木）に大里東校区で行う挨拶運動のボランティアを募集する傍ら、元気な挨拶を登校する生徒に行っています｡３年生が卒業して、寂しさを感じる校内ですが、朝一番で子どもたちの元気な挨拶が響き、卒業生から在校生にしっかりとバトンが受け継がれていることがわかりとても、うれしかったです。